

「目の前の山を登りきる」

本日、3529名の学部生、2983名の大学院生のみなさんを大阪大学にお迎えいたします。ここに集われたみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。また、ご臨席いただきましたご家族のみなさまに心よりお祝い申し上げます。

あらゆる可能性を秘めた前途洋々たる皆さんが、大阪大学の一員として、あらたな人生を歩むその瞬間に立ち会うことができ、大阪大学総長としてこれほど嬉しいことはありません。

はじめに、皆さんがこれから過ごす、この大阪大学について、少しお話をいたします。大阪大学は「大阪にも帝国大学を」という地元大阪府民の熱意と関係者の努力により、帝国大学にも関わらず、創立の準備金や当座の運営資金を大阪の有志で手配したという歴史を持つ大学です。その大阪大学の原点は、江戸時代末期の1838年に緒方洪庵が設立した「適塾」に見いだせます。外国語学部のルーツである大阪外国語学校出身の司馬遼太郎氏が小説『花神』の冒頭で、適塾を大阪大学の「前身」、緒方洪庵を「校祖」と表現しています。

適塾には、全国各地から1000名余の塾生が集まり、緒方洪庵のもとで、昼夜なく必死に勉学に励みました。塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉は、彼の自伝の中で、「ただ六つかしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であった。」すなわち、「苦しいなかに楽しみがあった、苦しいことがそのまま楽しみであった」と述べ、当時の大坂は江戸のように、士官への途があり大名から仕事に来るわけでもないのに、塾生は皆、ひたすらに勉学に勤しみつつ、その苦学を楽しんでいたと回顧しています。彼らは身分秩序の厳しい故郷を離れて、大坂の地でのびのびと青春を謳歌していたのです。

また、福澤諭吉の次に塾頭となり、我が国の医療制度・公衆衛生制度の基礎を築いた長与専斎は、「松香私志」のなかで、適塾で学んだ時代を、「この塾は適塾と称へ、四方より来たり学ぶもの常に百人を超え、四時輪講絶ゆることなく当時全国第一の蘭学塾なりき」と述べております。この言葉は、当時の適塾に対する評価を如実に表しています。

大阪大学医学専門部の卒業生で、ブラックジャック、鉄腕アトムなどで有名な漫画家の手塚治虫氏が自らのルーツを描いた「陽だまりの樹」という作品があります。このなかで描かれている手塚良庵は手塚治虫の曾祖父で、緒方洪庵の弟子として福沢諭吉らとともに学んだ蘭方医です。手塚良庵は種痘の普及や当時「ころり」とよばれて恐れられていたコレラの治療に命を注ぎました。緒方洪庵の教えである、「人の為に生活して、己のために生活せざるを医業の本體とす」や、「病者に対しては唯病者を視るべし。貴賤貧富を顧みる事なかれ」、すなわち「人のため、世のため、国のため、道のため」という精神にもとづき、彼らは明治維新という大変革の時代を信念とともに生き抜きました。

このように適塾の自由闊達な学問的気風と先見性の下で学んだ若い有志が、明治維新という我が国の新しい時代を切り開く大きな原動力になり、その適塾の精神は大阪仮病院に継承され、大阪医学校や大阪府立医科大学を経て、1931年に医学部と理学部の2学部からなる我が国6番目の帝国大学である大阪帝国大学へと繋がります。その後1933年には大阪工業大学が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学

と国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。1949年に新制国立大阪大学として再スタートした際には、法文学部を文学部と法経学部に改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。その後、法経学部は、法学部と経済学部に整備され、歯学部、薬学部、基礎工学部や人間科学部などを新設し、2004年の国立大学法人化を経て、2007年には、外国語教育における西の雄である大阪外国語大学との統合により、現在、11学部、16研究科、5つの附置研究所を擁する我が国屈指の総合研究大学に成長いたしました。

1931年の本学開学当時、医学部と理学部あわせて86名だった新入生数は、80年を経て、学部学生の定員では国立大学の第一位となり、本日、実に3529名の学部学生の皆さんをお迎えしています。

このように、174年前に設立された「適塾」を原点として、「懐徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、我が国を代表する総合大学として、世界に向かってたゆみなく発展を遂げるとともに、数多くの優れた研究者、教育者、文化人、そして政財界など各界の指導者や卓越した人材を世に輩出してきました。皆さんは、本日より、この大阪大学の新たな歴史の1ページを我々と共に書き継ごうとされている訳です。

今日、皆さんは全国から未来や夢、様々な思いを胸に大阪大学に入学されました。皆さんにとっての大学とはなんでしょう？

皆さんは小学校、中学校、そして高等学校などで勉学に励んでこられました。しかし、幼い頃には不思議に感じていたことで、大人になるにつれて、いつの日か「そういうものだ」と思考を中断してしまったものがあると思います。たとえば、宇宙はどのようにして誕生したのか？人はなぜ病気になるのか？なぜ蝶はあれほどきれいな模様をしているのか？なぜ日本という国があり、それと同様に世界には様々な国があるのか？確かな答えがわからない事は無数にあります。これらの疑問は素朴であるが故に、多くの皆様はいつしか疑問すら抱かなくなりました。大学とは、このような知識を積み重ねるだけでは解けない疑問、未だ人類が答えを知らない疑問に対する解答を探すところです。答えを見つけるのは、他でもない皆さん一人一人です。皆さんが、様々な疑問を掘り起こし、その答えを見つけ出すところです。言い換えれば「物事の本質を見極める」ところが大学であり、学問です。物事の本質を見極めるための「能力」を養うところが学部とすれば、大学院は、知の創造をするところ、すなわち専門性をさらに極めて、物事の本質を自ら「見極める」ところです。

一年前に日本を襲った未曾有の東日本大震災と、それに引き続いておこった原子力発電所の事故、また世界に目を向けると、ギリシャに端を発した経済危機や世界各地での政治の混乱、タイの大洪水など、今、人類は、かつて経験したことがない、地球規模の大きな変化に直面しています。産業革命により始まった豊富な物質文明に根ざした現代社会は、人類繁栄の代償として地球規模でありとあらゆるものを急激に変化させてきました。化石燃料の枯渇化は現実問題化しています。エネルギー問題の切り札であったはずの原子力発電も危うさが指摘されています。地球規模での温暖化などの環境問題、感染症拡大の問題は新たな危機として認識されています。そして、医学の発展や社会環境の改善は結果として爆発的な人口増加を招き、その先には食料問題や、先進国を中心に急激に進む超高齢化社会への対応がすぐ目の前の問題として押し寄せてきています。今までのように、

科学技術の力で自然を征服するという発想ではなく、如何にすれば人類は自然と共生できるかを真剣に考えなければなりません。また老・病・死など人間が避けて通れない問題も、今までは生命科学や医学の発展により克服するという姿勢で研究が行なわれてきました。しかしそのような発想を転換し、どのようにすれば人類はこれらの問題と共生し心安らかな人生を全うできるかを、見つめなおさなければなりません。現在ほど「物事の本質を見極める」ことが求められている時代はないのではないのでしょうか？単なる目先の解決策ではこれらの問題は決して解決できません。ましてこれらを科学技術の力のみで克服できるという考えは人類の夢に過ぎません。これらの問題に潜む本質を見極め、物事を解決する方策を考える必要があります。

では、どうすれば「物事の本質を見極める能力」を養うことができるのでしょうか？そのために大学の講義から今までよりも広く、深い知識を得ることは言うまでもありません。しかし、最も重要なことは、その機会を皆さん自らが求めることです。授業以外でも、たとえば、皆さんが大学で行う様々なクラブ活動、NPO法人活動への参加、夏期休暇を利用した海外研修など、大学のキャンパスや周辺にその機会は山ほどあります。大学院生の皆さんにとっては、実験やフィールド調査等を介して、より具体的に目の前の自然現象や社会現象に潜む物事の本質を追求する機会が溢れています。また、その機会を決して逃さないことです。その機会をものにできるか否かは皆さん一人一人の感性、好奇心、観察力、考察力、粘り強さ、長時間考える集中力と、そこから芽生える「ひらめき」にかかっています。今までのように先生が一つ一つ物事を教えてくれる訳ではありません。大学教員も真の答えを求めて日夜研究している問題は無数にあります。ただ机に座って授業を受けていればそれで物事の本質がわかる訳ではありません。また、物事の本質が皆さんのもとに向こうから微笑んで近づいてくる訳ではありません。それは、自ら求め、心の準備ができている人へのみ、ある日、ある時、突然訪れるのです。

私がおのように考えるに至った言葉を皆さんに紹介します。

1つ目は大阪大学の第11代総長で免疫学・内科学の山村雄一先生の言葉です。

「夢見て行ない 考えて祈る」

山村先生からいただいた直筆の色紙には、「未来への夢と希望、行動力と考えることの重要性、そして人間の能力を超えた自然へ謙虚な気持ちと人生への果てしない祈り」が優しさと共に生きづいています。考えてばかりいる、情報ばかり収集しているだけでは、独創的な事は生まれません。信念を持って行動に移し、新しいことを発見したとき、それがどれだけ素晴らしいかは、人間が判断できるものではありません。研究で壁にぶつかったときに、この言葉を唱えると心が休まるとともに、未来への希望が溢れてきます。私はこの言葉が大好きです。

次に、大阪大学の初代総長で、我が国における素粒子物理学の父であり、長岡・ラザフォード原子模型を提唱した長岡半太郎先生の言葉です。

「糟粕を嘗る勿れ」

長岡先生はこの言葉を直筆の額として本学に残されており、現在、それは総長室に掲げられています。糟粕とは酒の搾りかすで、滋養をとりきった不要物、精神のない遺物などを意味します。「糟粕を嘗る勿れ」とは、すなわち「作った人の精神を汲み取らず、形だけをまねるようなことはするな」という意味です。貴重な大学生活を、受け身のまま過ごすのではなく、どうか人と違う、自分らしさを見いだし、「物事の本質を見極める能力」を身につけて下さい。

最後になりましたが、私自身の経験に基づき皆様にお伝えしたい言葉があります。私は、学生の時には、国内の多くの山に登りました。その後の長い研究生活の中で、研究と対峙する自分の姿と学生時代の山登りの実体験を照らし合わせて、自分自身に言い聞かせてきた言葉です。

### 「目の前の山に登りきる」

という言葉です。

皆さんは、今、大阪大学に入学という一つの大きな山の頂に立っています。皆さんはその頂に、どのような思いで立っているのでしょうか？ここまでの長い道りを思い出しながら、感慨に耽り目の前の新しい景色を見つめているのかもしれませんが。あるいは、これから挑戦しなければならない、眼前に聳え立つ山々を仰いでいるのかもしれませんが。皆さん一人一人が見ている景色は様々で異なることでしょう。しかし、皆さんに共通しているのは、その景色は皆さんが今まで見たこともない、経験したこともない景色であるということです。

私は、常日ごろ学生さんや若い人と話す機会があると、「目の前の山に登りきる」ことの重要性を語ってきました。山に登るだけでは得られない経験が頂上まで「登りきる」ことで得られるのです。皆さんの前には登るべき山として常に越えなければならない試練や困難、あるいは叶えたいと強く願う志や夢があるはずです。人は夢を心に、あるいは未来への希望を胸に目の前の試練や障害を乗り越えて行こうと努力し、そして目の前に聳えている山を登って行きます。

人生における山では、頂上に立って初めてその山の高さがわかります。何より重要なことは、たとえ登りきった山が低い山であったとしても、登りきることにより、今まで見たこともない景色を見ることができるといことです。これから進むべき道が、挑戦するべき山が展望できるのです。皆さんが富士山に登っているとしましょう。そして、9合目までたどり着いたと想像してください。富士山なら9合目につけば必ず標識があります。そこにたどり着いた人は、いくら疲労していても、いくら困難を伴い、体力の限界に近づいているとしても、特別な事情がない限り必ず富士山頂上に立つはずですが、しかし、人生における登山では、どこにも標識はありません。今、自分が9合目にいるのか、あるいは1合目なのかは、誰にもわかりません。頂上に立ったとき、「自分が頂上に立ったこと」を初めて知るので。頂上は、それを求める努力をし、必ずあると信じている人の前に、突如現れます。それは心の準備ができていない人に突如訪れる「ひらめき」そのものです。人生の山登りにおいては、その途中であきらめて下山してしまうことが多々おこります。

皆さんは本日晴れて1つの山の頂に立つことの喜び、その意味、そしてその先に広がる未来という素晴らしい景色を展望できることを実感しておられるはずですが。1回でも苦しいプロセスを経て頂上に立つことができた人と、途中で下山した人では、大きな違いが生じます。今回の経験を忘れることなく、これからも目の前の山を一つ一つ登りきる努力を怠らず、目指すべき山の頂に立って欲しいと思います。長い人生では山もあれば、谷もあります。たとえ谷底に落ちても、それは次の

山登りの絶好のチャンスと捉えて、次の山を目指せばいいのです。いつまでも未来への希望と夢を失うことなく、皆さんそれぞれの目の前の山を登りきってください。

君たちにあって私に無いもの、それは、未来という無限の可能性です。すなわち、若き希望です。君たちの目の輝きそのものです。これは若い今だからこそ天から与えられた可能性なのです。どうぞ、この瞬間の、この感激を忘れずに、大いなる志をもって、君たち一人ひとりの夢を実現させてください。

君たちが夢を実現させて下さることを強く念じて私からの告辞とさせていただきます。

平成24年4月3日  
大阪大学総長 平野俊夫